

# なりた

成田市  
指定史跡

## 江戸や銚子を結ぶ水運の要所——寺台河岸跡

寺台地区は、江戸時代に香取・鹿島神宮に向かう街道の中継場所として栄えた宿場でした。また、その一方で根木名川から利根川に出て、江戸や銚子と成田を結ぶ水運の要所の一つでもありました。

河岸とは、川岸に設けられた人々の乗り降りや荷物の揚げおろしをする場所のことです。寺台の吾妻橋付近には北から山六河岸・山小河岸・黒川河岸の3か所の河岸があり、総称して寺台河岸と呼ばれていました。河岸からは米、薪、炭、野菜などが積み出され、江戸や銚子からは醤油、魚、塩、肥料などが運び込まれました。安政年間に新勝寺本堂（現釈迦堂）を建てる時、材木の積み降ろしには山六河岸が使用され、また、黒川光治家文書の中には、東京深川の肥料会社から寺台河岸黒川回漕店への送り状が残っています。

成田詣には、江戸から船橋・佐倉を通る街道ルートと、船で江戸から利根川を滑川（下総町）の新川河岸まで下り、そこから船を乗り継ぎ、根木名川をのぼり寺台に着く水上ルートの二つがありました。



黒川河岸の土蔵の前に集まる人々（明治中ごろ・「歳月の忘れもの」より平成6年11月発行）

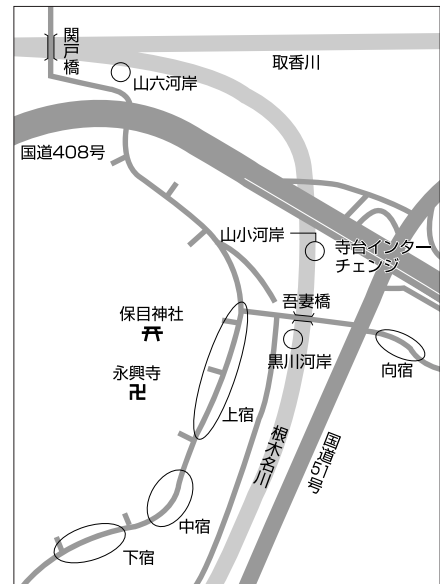


**歴史と伝統文化の  
まち・成田。市内には、  
歴史ある文化財  
が多数あります。**



寺台河岸の繁栄を見てきた2つの石碑。吾妻橋の脇に立っている

しかし、明治30年に成田鉄道が開通すると河川交通は衰退の一途をたどり、当時の寺台河岸の面影はすっかりなくなってしまいました。今、吾妻橋のそばに水神宮と黒川河岸跡と刻まれた石碑だけが、ひっそりと残っているだけとなりました。



寺台河岸(○印)と宿場(○印)の位置図

### 編集後記

市の職員が講座の講師を務める「なりた知っ得出前講座」(2・3ページに掲載)。広報課にも出前の注文をいただきました。参加者のみなさんの真剣な表情に、説明するこちらにも力が入りました。いきいきとした表情の写真を、見出しで読ませる工夫を、文字はなるべく少なくなどの編集上の注意点を

を受講者に伝えながら、自分自身にも言い聞かせます。「実際に広報紙を作ってみて、苦勞がわかります」という感想を聞き、仲間が増えたようでうれしくなりました。

暮らしに役立つ情報が満載の「出前講座」。どうぞ気軽にご注文ください。